旅人のアイデンティティ
―D．H．ロレンス『イタリアの薄明』を読む―

知識人にとって、こうした比喩的な意味でいう亡命状態とは、安住しないこと、動きつづけること、常に不安定な、また他人を不安定にさせる状態をいう。
――― エドワード・W・サイード
『知識人とは何か』

石原　浩澄

はじめに

2002年に出版された*Cambridge Companion to Travel Writing*に寄せた「序文」の冒頭で Peter Hulme & Tim Youngs は、

> Travel has recently emerged as a key theme for the humanities and social sciences, and the amount of scholarly work on travel writing has reached unprecedented levels.（1）

と述べ、近年における旅やトラベル・ライティングへの関心の高まりを指摘している。人文・社会科学の分野において旅への注目がこれほど高まってきた背景には、もちろん各分野に特有のさまざまな理由があるであろうが、そのひとつとしてポストコロニアルの批評状況におけるヨーロッパ中心主義批判があるだろう。すでに古典的研究となりつつある Mary Pratt の *Imperial Eyes*（1992）が詳細に論じているような、ヨーロッパ拡張主義の過程における、ヨーロッパによる他者表象およびヨーロッパ自身の自己認識を刻印するものとしてのトラベル・ライティングへの注目の高まりである。

また、今日のわれわれを取り巻く状況の特徴に別の理由を求めることもできるかもしれない。人・物・情報など、あらゆるものが瞬時に遠くへ、しかも国境を越えて動いていく現代社会において、観光やビジネスや調査研究を目的とした「旅行」だけでなく、何らかの形で「移動」する、あるいは故郷・ホームを「離脱」しなければならないという状況が発生している。旅や移動行為への注目は、このような状況に対する現代社会の関心の高まりを反映していると見なすことができる。「旅行」と「亡命」など、同じ移動行為とはいえ質的に異なる故郷離脱の形態があることも明らかだが、ホームから離脱した者の視点は共有されているものである。また たとえ一時的にせよ「故郷離脱」行為としての旅は、その主体である旅人にホーム・故郷についての再考を促し、そこへの帰属について意識的にするであろう。帰属意識は旅人の自我やアイデンティティ形成にも大いに関与するものである。P. Gilroy の *Black Atlantic* は歴史的な移動経験の中から新たなアイデンティティ形成を論じたものの代表であり、ヴィクトリア時代の旅を扱う Morgan の *National Identities and Travel in Victorian Britain*も、旅をするイギリス人のアイデンティティ形成について論じている。

本稿は、このような旅をめぐる諸議論を見据えながら、イギリスの作家ロレンス（D.H.Lawrence, 1885－1930）の旅行記『イタリアの薄明』（*Twilight in Italy*, 1916、以下『薄明』と略記）を読み直そうとする試みである。ロレンスはイタリアに関する３つの紀行文集を残している。その第１作になる『薄明』は10の小品からなるエッセイ集であるが、そのうち前半の４篇はすでに1913年に『イングリッシュ・レヴュー』誌上で発表されている。ロレンスは実際、複数回イタリアを旅しているが、『薄明』のエッセイはそのすべてが１回の旅に基づいたものではなく、２回の旅をもとにその印象を著したものである。したがって、『薄明』の旅の記録やその背景を実際に実行された単一の旅に探ろうとしてしまうと、

旅の記録に矛盾が生じているような印象を受けてしまう。このようなロレンスの旅の事実を踏まえた故のことであろうが、ペンギン版『薄明』(1997)に「序文」を書いている Stefania Michelucci は、『薄明』の各エッセイの選択や序列には特に大きな意味はないと述べている(xvii参照)。しかし本稿はそれとは異なる立場を取っている。作者の意図はどうであれ、またたとえテクストが時期の異なる2つの旅を基にしたエッセイの集合体であっても、本稿ではあくまでもひとつにまとめられた旅のテクストとして『薄明』を考えていきたい。したがって、小品の選択や順序も意味のないものではない。

『薄明』を論じるにあたって、これまでの議論を極めて簡単にではあるが瞥見しておきたい。旅行記ジャンル分析の方法が確立されていないことを指摘するTracy(1983)が、旅行記を独立し自立したものとして考察することの必要性を訴えたことからもわかるように、ロレンスの旅行記についても、独立し自立した文学形態としてよりも、むしろ彼のフィクション読解に有用な資料としての扱いが主だったようである。『薄明』批評史の比較的早い時期から、例えば Nehls(1953)が『薄明』を称して、「今後書かれることになる短篇や小説に現れる.....考えや思想の多くを記録したノート」(272)と述べているところなどにそれは顕著に表れている。

その後もロレンスの旅の記録をめぐっては様々な議論が続けられてきた。テクストに見られる哲学・思想を読み取ろうとするもの(Janikなど)、作者の男女観に注目するもの(Fasickなど)、エッセイの異稿比較をするもの(Wagnerなど)などがいくつかの例である。そのような中、Meyers(1982)はアイデンティティの問題に注目した。Meyersによれば、イギリスから逃亡したロレンスにイタリアは避難所を提供し、またイギリスの近代機械文明とは対照的な「肉体的ヴァイタリティ」や「伝統的生活」などの「原始的要素」(primitive elements)を提示したのであるが、結

局は外側から祖国イギリスを振り返ることによって、ロレンスのイギリス人としての文化的アイデンティティは強化されたのだと言う。先述のMorganによる旅人のアイデンティティ論と類似の議論である。

はたして『薄明』のテクストにおいて、ホームを離脱した旅人のアイデンティティは強化されるのであろうか。本稿のねらいは、帰属をめぐるテクスト、旅人のアイデンティティを記録するテクストとして、『薄明』を読み返すことであるが、最終的にわれわれはMeyersのとらえる旅人とは異なる旅人の姿を見出すことになるであろう。

以下ではまず『薄明』に描かれている何人かのイタリア人に焦点をあて、彼らのイタリアへの帰属意識を見ていくところから議論を始めたい。そこには均質で単一的ではなく、変化しつつあるイタリア人の意識を見ることができるだろう。次に、『薄明』に特徴的である語り手の二元論的ヴィジョンの哲学を再考し、その導入の目的・戦略を探り、帰属との関わりについて考える。またアイデンティティや国家への帰属を意識せざるを得ないような状況を生み出す背景を考えるにあたり、作者のバックグラウンドや、旅の舞台となっているイタリアの状況にも目を向けてみる。そして、流浪する旅人に特徴的なアイデンティティに着目し、『薄明』という旅行記テクストの新たな読みの可能性を探っていきたいと思う。

Ⅰ.『薄明』におけるイタリア人の帰属意識

旅をする主体でもある『薄明』の語り手は、イタリアを描くにあたって何に注目しているだろうか。われわれは語り手の注目の対象――および、その性質――から語り手自身の特徴や問題意識、言いかえれば『薄明』という旅のテクストにおけるイタリア表象の特徴を伺うことができると考えられる。『薄明』における旅人の視線の対象に関しても、イタリアの自然、産業、歴史、男女の関係、子供観、など、いくつか指摘する

ことができるだろうが、その中で小論が着目したいのは、登場人物とイタリアとの関係、つまりイタリア人の帰属意識という点である。

『薄明』の第１エッセイ“The Crucifix Across the Mountains”は、旅人がイタリアに入る前の、ドイツからオーストリアを抜けるアルプス越えの記録であり、イタリアを直接描いたものではないが、Michelucci が「『薄明』の構造において、北と南のリンクを提供するという重要な主題にかかわる機能を演じている」（xxviii）と評しているように、冒頭エッセイにふさわしく、いくつかの点において後のエッセイにつながる主題を暗示し、その後の旅を予示する働きをしている。土地への帰属という点に関しても、土地にしっかりと根差した高地バヴァーリア農民の描き方は、本稿の議論の対象であるイタリア人表象にとってもおおいに示唆的なものとなっている。

> Hence the beauty and completeness, the finality of the highland peasant. His figure, his limbs, his face, his motion, it is all formed in beauty, and it is all completed. There is no flux nor hope nor becoming, all *is*, once and for all. The issue is eternal, timeless, and changeless. All being and all passing away is part of the issue, which is eternal and changeless. Therefore there is no becoming and no passing away. Everything *is*, now and for ever.（94）

「神秘的な肉の喜び」（mystic sensual delight, 93）を軸にして動き、「血」と「感覚」（senses）がすべてであり、「知性」（mind）が介入しないと形容されるこのバヴァーリア人たちの特徴は、後に見るようなイタリア人のそれと共通している。近代文明へのロレンス的アンチテーゼとしてなじみの深いこれらの特徴よりも、むしろここで注目したいのは、土地に根差したバヴァーリアの農民を「血」や「肉」の語彙を用いて感覚

的・肉感的として提示しているばかりでなく、強烈な土地への愛着・帰属を持つ彼らの特徴を「不変性」（changeless）、「無時間性」（timeless）、「完結性」（completed）などとして提示している点である。変化して何か（別のもの）に「なる」（becoming）ということはなく、常にそのままで「ある」（is）というのだ。「流れ」（flux）はなく、「変化がなく」、すべてが「完結している」。土地への帰属をスタティックなものとして、変化や生成（becoming）に対置して捉えている点は、その後の『薄明』の展開に極めて示唆的であるという点を指摘しておきたい。

第２エッセイからのイタリアの旅に登場してくるイタリア人たちの土地への帰属意識は必ずしも均質ではない。結論を先取りして言えば、後の登場人物になるほど次第にそれは弱くなっているように描かれている。第１のイタリア・エッセイで描かれる「糸紡ぎの老女」（spinner）は、“ like the Creation, like the beginning of the world ”(108）として天地創造の過去へと接続される、なかば神話化された人物である[1)]。「無意識」で「自意識のない」（107）彼女は同時に「土の一片であるかのように、テラスの生きている石のように」（105）土地に密着している。彼女と土地との関係は、帰属意識などははるかに超越して、ほとんど一体化と言ってよい。したがって、バヴァーリア人形容の論理に違わず、このような老女は「永遠であり、不変である」（eternal, unchangeable, 108）と形容される。「無意識」と規定されているためか、老女は自らの帰属意識を読者に吐露する機会は奪われているが、旅人＝語り手が彼女のことをイタリアという土地と一体となるほどに、極めてイタリア的なものとして捉えていることには間違いはない。

このような神話的で象徴的な人物を配した後に語り手は「レモン園」（The Lemon Gardens）エッセイで、旅人に宿を提供している「家主」（padrone）である Pietro di Paoli を描く。一方でイギリス的な「機械」へのあこがれを抱いている Pietro だが、彼は主に古いイタリア、古い世

代の最後の残滓として表象されている。

> He . . . always makes me think of an ancient, aristocratic monkey. The Signore is a gentleman, and the last, shrivelled representative of his race. (114)

古いイタリア人の代表として過去へとつなぎとめられている(fixed inextricably in the past, 132) Pietro の姿も「固定化した」(fixed) イメージで満たされている。「終局と宿命」(finality and fatality) のジェスチャーをし、「時を越えたみじめな様子」(blank, ageless look of misery, 131) を見せる。バヴァーリア人や糸紡ぎの老女同様、変化の可能性を奪われたような「不変」の運命を背負わされているのだ。

Pietro の表象でもうひとつ印象的なのは、彼の描写を通してイタリア人にとっての子供の重要性が述べられている点である。「あたかも彼のレゾン・デートルは息子を持つことであるかのようだった」(124) と語り手は述べる。このことを彼はイタリア人の " phallic worship " の現われであるととらえ、これが「われわれに対するイタリア人の魅力の秘密なのである」と語るように、北ヨーロッパに対して、感覚的・肉体的魅力をもったイタリアの特性との関連で解釈する。この点に関して、ここではロレンス流の「血」と「肉」のレトリックにからめとられてしまうのではなく、もう少し別の角度から考えたい。つまり、この挿話はホームや祖国への帰属の強さという主題とつなぐことができると考えられるのである。これも古典と言ってよい *National Identity* (1991) を著した A. Smithによれば、ナショナル・アイデンティティの機能のひとつは、人々が「死という結末を乗りこえ、個人の不死への手段を確保する」ことだと言う。そして次のように述べる。

> (T)he nation can boast a distant past, even where much of it must be

> reconstructed or even fabricated. Even more important, it can offer a glorious future similar to its heroic past. In this way it can galvanize people into following a common destiny to be realized by succeeding generations. But these are the generations of 'our' children; They are 'ours' biologically as well as spiritually, . . .（161）

子どもや子孫を通して不死でいるということ、つまり、子どもを通して死後の未来においても、国――たとえばイタリア――に帰属することを確認することによって、ナショナル・アイデンティティを確認するということが述べられている。Pietro の言動はこの説明に沿って解釈することが可能であろう。本エッセイにおける「子ども挿話」の機能はイタリア人の帰属意識の強さを示すことにあると言えるのである。ただし、実際には子どもがいないことに不安を抱くPietroを描くことで、連綿と続いてきたものに生じるであろう断絶が予示されており、イタリアの変化の兆候が描かれている。

続く「サン・ガウデンツィオ」（San Gaudenzio）エッセイに登場する農夫の Paolo も、Pietro 同様に " The old order, the order of Paolo and of Pietro di Paoli, the aristocratic order of the supreme God "（164）というイタリアの「古い秩序」に属するものとして描かれる。Paolo は出稼ぎ移民としてアメリカへ渡った経験を持っている。「移民」という主題は、続くいくつかのエッセイにも登場してくるもののひとつであるが、この故郷離脱経験にもかかわらず、Paolo のイタリアへの帰属は絶対的なものとして語られている。

> He stayed five years in the gold-mines, in a wild valley, living with a gang of Italians in a town of corrugated iron.
>
> All the while he had never really left San Gaudenzio. . . .

> In real truth he was at San Gaudenzio all the time, his fate was riveted there. His going away was an excursion from reality, a kind of sleep-walking. He left his own reality there in the soil above the lake of Garda. (162-3)

物理的な離脱は Paolo の精神までもイタリアから引き離すことはできなかった、というわけである。Paolo とイタリアの土地とのつながりはこれまでのどの人物の場合よりも強く描かれているようだ。一方で語り手はこのような Paolo を絵に描かれた北イタリアの農夫と比較して、「奇妙な高貴さ、同じような貴族的で永遠に不動の様子」(the same curious nobility, the same aristocratic, eternal look of motionlessness, 156) を持つと述べている。Paolo は「自己完結」(so finished in his being, 156) していて、「彼には何か完結し、不変のもの」(something concluded and unalterable about him, 156) がある。

語り手はこれと同時に、対照的な性格を有する妻 Mariaを、

> . . . nothing to look forward to, no future, only this eternal present. She had been in service, and had eaten bread and drunk coffee, and known the flux and variable chance of life. She had departed from the old static conception. (強調は筆者, 159)

と描きながら、イタリア(の生活)を硬直した「静的な」、変わることなき「永遠の現在」と規定する。ここでも古いイタリア、そしてそこに帰属することが「不変性」や「閉鎖性」と結び付けて語られているのである[2)]。旅人はこれらの性質を肯定してはいない。旅人が一方では近代文明によって汚された祖国イギリスの醜さを批判しながらも、同時にPietroのことを思い出しながら、“And yet, it was better than the padrone, this

old, monkey-like cunning of fatality. It is better to go forward into error than stay fixed inextricably in the past.”(132) と述べるとき、過去と結びつけられた不変・硬直という性質は、明らかに否定的にとらえられていることがわかる。

既述したように、テクストはイタリア人をすべて均質に記録しているわけではない。土地に対する意識も変わりつつある。次に語り手は Paolo の息子 Giovanni に関心を示す。Paolo と Maria という対照的な両親をもつ Giovanni はイタリアへの帰属意識という点でも変化を見せ始める。彼はアメリカ行きを夢見て英語を学んでいる。彼の渡米は父のような一時的 “ excursion ” ではない。「彼の夢は(土地を離れ)去ることだったのだ」(His dream was to be gone, 164) と語られている。「Giovanniにとって世界はサン・ガウデンツィオではなかったのである。」(164)

『薄明』にはもうひとりの Giovanni が登場する。アメリカ渡航経験があり、そこで “ John ” と呼ばれていた青年である。“ John ” の話によると、彼は17歳か18歳の時「目的もないままに移民の男たちとともにアメリカへ渡った」(183)。アメリカで夜学に通い英語も学んだが、民族的な差別を受けつらい思いをすることもあり、一度は相手を殺そうと思うほどのけんかをしたこともあった。一方仕事では、店の「親方」(foreman) にまでなり、ある程度の成功を収めた。しかし20歳の時、彼は兵役に服するためにイタリアに戻ってくる。結婚をし、子どももできたが、いま再びアメリカへ渡ろうと考えている。イタリアでもそれなりに成功しているにもかかわらず、再び発とうとする “ John ” のことを旅人＝語り手は理解ができない。

> “But I will go to America. Perhaps I shall go into the store again, the same.”
>
> “But is it not just the same as managing the shop at home?”

> “No - no - it is quite different.”
>
> . . .
>
> It was a great puzzle to me why he would go. He could not say himself.
>
> . . .
>
> There was a strange, almost frightening destiny upon him, which seemed to take him away, always away from home, from the past, to that great, raw America. He seemed scarcely like a person with individual choice, more like a creature under the influence of fate which was disintegrating the old life and precipitating him, a fragment inconclusive, into the new chaos. (185-6)

語り手は、“ John ”がイタリアを去る理由は合理的に説明できるようなものではなく、それは人間がどうにも抗いようがなく、古くからの生活形態に変化をもたらす運命のようなものだと述べている。Paolo や Pietro の“ the older order ”に依拠し安住することのできない世代は、イタリアという土地に帰属し続けることはできないのだ。

別のエッセイではこの“ the older order ”の崩壊は、農民が土地を失い工業労働者化していく過程と重ねられていて、近代の資本主義工業化の歴史過程として解釈されているところもある（例えば“ San Gaudenzio ”の章を参照)。資本主義化という側面のみならず、近代がそれまで比較的狭い土地に限定されていた人々を、より広い世界へと投げ出すという認識――見方を変えれば――何らかの故郷喪失の体験をもたらすという認識はたびたび指摘されることがある[3)]。社会学者のバーガーらは、近代生活の大きな特徴のひとつを「安住の地の喪失」（homelessness）状態としてとらえる。バーガーらによれば、「近代の人間は、非常に差異のある、しばしば相矛盾する社会的文脈の間で、絶えず変身を行なっている。. . . . . 時間的関係から見ても、多様な社会的世界の間をつ

ぎつぎと移動している。近代社会のますます多くの人間が、その生まれたときの社会的環境から根こぎにされているばかりでなく、そのうえ、その後に続くどの環境も、真の『安住の地』となることに成功しない」（214）と言う。『薄明』の人物たちの故郷離脱経験は、近代に特徴的な現象として大きな視野からとらえることも可能であろう。

語り手は“ John ”の決断を不可解に思うと同時に、旅立とうとする彼の姿に大きな不安を感じているようだ。

> Nothing was more painful than to see him standing there in his degraded, sordid American clothes, on the deck of the steamer, waving us goodbye, belonging in his final desire to our world, the world of consciousness and deliberate action. With his candid, open, unquestioning face, he seemed like a prisoner being conveyed from one form of life to another, or like a soul in trajectory, that has not yet found a resting-place. （186）

語り手の不安は、“ John ”が Paolo たちが愛した古いイタリアを離れて、「意識の世界」（world of consciousness）、近代文明に汚されている「われわれの世界」へ旅立とうとしているという点にもあるが、もうひとつには、帰属する「安住の地」（resting-place）を見出し得ず、「軌道をさまよう」根無し草的存在のような状況への不安でもあるだろう。これまでの人々が安住できていた「ホーム」を離れざるを得ない新しい世代の人物の姿として“ John ”をとらえることができるだろう。土地への執着を閉塞的な硬直状態ととらえていた語り手だが、いざ帰属から解き放たれた現実は、この段階では「囚人」（prisoner）のイメージとも重ねられ、不安なのである。後にまた触れることだが、旅人としての語り手の置かれた状況は、明確な必然性もなく祖国を離脱しようとしている“ John ”のそれに近いものであり、語り手の“ John ”へのこだわりは、二人の置

かれた状況の類似性に由来すると考えられる。

続く「亡命イタリア人」のエッセイにおいてこのホーム離脱の主題はさらに明確になる。と言うのもタイトルが示すように、旅人はスイスのある村の工場で働いている「流浪の（亡命中の）イタリア人」（Italians exiled in Switzerland, 197）と出会うのである。語り手はこれまでに出会ったイタリア人たちを回顧し、イタリア人の中に生じている変化について述べている。それによると、Paolo らの古い世代は一時的にイタリアを離れても再び戻ってきたのであるが、それは下に見るように「古い形態」が彼らを支配していたからであった。

> The dominance of the old form was too strong for them. Call it love of country or love of the village, campanilismo, or what not, it was the dominance of the old pagan form, the old affirmation of immortality through procreation , . . . （200）

ところが一世代若い“ John ”やここスイスのイタリア人たちは、少なくとも「古いイタリア」へは戻らないと言う。

「アナーキスト」とされている一団の中心的人物は Giussepino という青年である。語り手に話しかけてくる Giussepino はさっそく政府批判を展開する。

> “── a man has no country. What has the Italian government to do with us? What does a government mean? It makes us work, it takes part of our wages away from us, it makes us soldiers ── and what for? What is government for?”
>
> “Have you been a soldier?” I interrupted him.
>
> He had not, none of them had: that was why they could not really go

back to Italy. Now this was out; this explained partly their curious reservation in speaking about their beloved country. They had forfeited parents as well as homeland.

"What does the government do? It takes taxes, it has an army, and police, and it makes roads. But we could do without an army, and we could be our own police, and we could make our own roads. What is this government? Who wants it? Only those who are unjust, and want to have advantage over somebody else. It is an instrument of injustice and of wrong.

"Why should we have a government? Here, in this village, there are thirty families of Italians. There is no government for them, no Italian government. And we live together better than in Italy. We are richer and freer, we have no policemen, no poor laws. We help each other, and there are no power.

"Why are these governments always doing what we don't want them to do? We should not be fighting in the Cirenaica if we were all Italians. It is the government that does it. They talk and talk and do things with us: but we don't want them. (201)

この一連の Giussepino の政治的発言はこれまで見てきたイタリア人たちをひとつのパースペクティヴの中に収める性格のものとしてとらえることができる。すなわち「帰属」ということの意味が、これまではイタリア北部の村落共同体という極めて限定された地方を対象としたものなのか、あるいは「土地」といったやや漠然としたものを対象としたものなのか判然としなかったのだが、この Giussepino の発言によって帰属の対象がイタリアという国家・ネイションへと限りなく限定されてくるからである。

Giussepino は兵役や納税といった、まさに近代国家の機能の根幹に関わる点を批判する。「国民」としての義務――別の言い方をすれば、国家が「国民を創出する」手段そのもの――に疑問を投げかけているのだ。国家に帰属することの意味、国民であることの意味、イタリア人――そして間接的にイギリス人――というアイデンティティの意味を問う発言となっているのである。問いかけられた語り手はここでも明確な返事を返すことはできない。

> But I did not want him to go on: I did not want to answer. I could feel a new spirit in him, something strange and pure and slightly frightening. He wanted something which was beyond me. And my soul was somewhere in tears, crying helplessly like an infant in the night. I could not respond, I could not answer. He seemed to look at me, me, an Englishman, and educated man, for corroboration. But I could not corroborate him. I knew the purity and new struggling towards birth of a true, star-like spirit. But I could not confirm him in his utterance: my soul could not respond.（202）

“ John ” の様子に漠然とした不安を感じていた旅人＝語り手に、「国に属すること／国民であること」の問いが鋭く突きつけられる。明確に政府批判をしているにもかかわらず、語り手は Giussepino のこの問いを、“ new spirit, ”“ something strange ” などと抽象化してしまう。語り手自身、Giussepino の問いに明確に返事ができなかったと率直に告白しているが、真正面から受け止めることを回避するかのように、問題を抽象化する彼の態度から語り手自身の当該問題――国家・国民の意味――に対するアンビヴァレンスがうかがえる。

以上のように『薄明』における主な登場人物のイタリアへの帰属意識を見てくると、徐々にではあるが一定の変化――神話的に土地と同化し

たかのような強い帰属状態から、祖国離脱の現象まで――が語られていることが伺える。この離脱にも、その理由の判然としないものから、逆に明確な意志を伴ったものまであった。そしてこの変化は大まかに時代の、年代間の差として現れてきていた。“ John ” のエッセイで、語り手はイタリア離脱の理由を、人間が個人としては抗いがたい運命のようなもの、といった抽象論を展開していたが、Giussepino の発言に至ると、離脱はイタリアという国家を強く意識したものとなっていた。

これらイタリア人を記録する語り手は決して中立で無色透明の存在ではない。イタリアを表象する語り手は「帰属」の問題を選択して描いているということにわれわれは意識的になるべきであると前に述べた。こうして他者としてのイタリア人を描きながらも、時には微妙に、時には大きく感情を揺り動かされている旅人＝語り手の様子を同時にわれわれは観察することもできるのである。帰属意識やアイデンティティはイタリア人のみの問題ではなく、語り手自身のそれも問われることになるのだ。この点がさらに明確になってくるのが最終エッセイであるが、この議論は第Ⅳ節で再び取り上げることとして、次節では『薄明』テクストのもうひとつの特徴としてしばしば取り上げられる「哲学」の問題を考えてみたい。

Ⅱ.『薄明』の「哲学」再考

およそ「旅行記」にはあまりふさわしくないほど『薄明』の語り手はイタリアの土地や人物の描写を離れて、自らの思想やヴィジョンの展開へと大きくそれることがある。具体例は下に概略を示すが、これまでの批評家にならってここでは便宜上この語り手のヴィジョンを「哲学」あるいは「二元論」と呼ぶことにする。それはテクストの中で目立つ部分ではあるが、批評家の間では Aldington のように「哲学」が顔を覗かせている部分は全体と整合しないために、飛ばして読んでも構わないとす

るやや極端な立場や、あるいは Tracy のように、二元論の展開はあまりうまくいっていないとする立場などから、二元論の枠に積極的に乗っ取って『薄明』の他の部分も捉えていこうとする立場があるようである。

1981年にロレンスの旅行記研究を著した Ivan Del Janik は後者の立場に立つ論者のひとりであろう。Janik は『薄明』を中心に論じた章を「二つの無限」（Two Infinitives）と題し、二元論ヴィジョンの枠の中で論を展開する。Janik はロレンスは決して両極のどちらか一方を支持しているのではなく、『薄明』では両者の緊張関係あるいは相互作用（interplay）の重要性が強調されていることを指摘する。ただし、この相互作用をこの時期のロレンスは「王冠」や「聖霊」などのイメージを用いてシンボリカルに表現はできても、その政治的・社会的な局面での適用（application）は示しきれていないと述べ、Janik は作家の限界を指摘することも忘れていない。

今ここで『薄明』の「哲学」をイタリアの表象に無関係あるいは不適当として無視することは生産的ではないだろう。前節での議論と同様に、『薄明』というテクストにおけるイタリア表象の一環として語り手の「哲学」が展開されるという点にわれわれは注意を払うべきだと思う。すなわち、イタリア表象の文脈から遊離した作家の思想として「哲学」を取り出し、例えば他のフィクション読解のための道具として論じるのではなく、なぜここで「哲学」が述べられるのかが問われるべきなのである。意外にも従来の議論に欠けていた視点かもしれないのだが――。よって、以下では帰属の問題に引き付けたかたちで「哲学」を再考してみたいと思う。

まずはこの「哲学」を概観しておく必要があろう。一定のまとまりをもってこの思想が展開されるのは「レモン園」と「劇場」（The Theatre）のエッセイにおいてである。「レモン園」において家主の Signore Pietro の館を訪ねる旅人＝語り手は、館に到着するとまもなく、「わたしはイタリア人の魂について考えた」（115）と書き、その後約６ページにわたっ

て持論を展開する。イタリア人の魂が「いかに暗く、永遠の夜に向かって突き進むか」（115）と述べ、まずイタリア的特質を「闇」（Dark）、それに対する北方ヨーロッパおよびイギリス的特質を「光」（Light）として二項対立的に規定する。そしてその後二者の属性がいろいろと付加されていく。大まかに整理すると以下のようになる。

England	vs.	Italy
Light		Dark
Spirit		Flesh
Mind		senses
Christ		Father
Not-Me		Me（Self）
（sience, machine）		

ロレンスの読者にはすでにおなじみの構図であろう。注目されることの多い評論文「トマス・ハーディ研究」や「王冠」などで展開される二元論なのである。「レモン園」も「劇場」もどちらも1913年に『イングリッシュ・レヴュー』誌上ですでに発表されたものであったが、『薄明』としてまとめるにあたり大幅に加筆・改稿されたことはすでに「はじめに」でも触れた。改稿の時期は1915年７月末からであるが、「王冠」の執筆もこの時期に重なっていることから、伝記批評家の井上義夫は、『薄明』への「哲学の挿入」（299）もこの時行なわれたものと見ている。

『薄明』の「哲学」は、宗教的・身体的・視覚的用語をさまざまに駆使してシンボリカルに二項対立を構築していくが、ここで注目したいのは、それが結局はイタリア対イギリス（北方ヨーロッパ）という民族・国民的差異を定立するために用いられているということである。

このように二元的に他者を差異化していく戦略は、先のJanikも、

Blake、Schopenhauer、Hegel などを例に指摘しているように、西洋近代思想に伝統的・典型的なものであるということは言うまでもない。作者ロレンス、あるいは旅の語り手は、極めて西洋近代的な認識論に基づいてイタリアを差異化しているということになる。

この近代二元論的な対立構図の中に、中心 vs 周縁、あるいは文明 vs 自然などといったヨーロッパ中心主義的ヒエラルキー関係を読み込んでいくことも可能だろう。しかし、小論の議論に必要な認識は、左項、右項のどちらであれ、いづれも生活が存在する場（ホーム）であり、一方に傾斜することはそこへの帰属を意味するということである。つまり、「哲学」として示される二元論は西洋近代思想に依拠した認識法であると同時に、これが帰属する「ホーム」との関連において語られる時、それは国民・民族的特徴やアイデンティティを明確化するための方法・戦略ともなりうるのである。

ただし、語り手は二極を構造化するだけにとどまってはいない。自らの二元論の硬直化を批判し乗り越えようとするかのように、“It is past the time to cease seeking one Infinite, ignoring, trying to eliminate the other.”（125）と述べて、理論の上では一方の極に固着することを決して肯定してはいない。彼が理想の姿として模索しているものはあくまでその中間的な存在のあり方である。

> The two Infinites, negative and positive, they are always related, but they are never identical. They are always opposite, but there is a relation between them. This is the Holy Ghost of the Christian Trinity. And it is this, the relation which is established between the two Infinites, the two Natures of God, which we have transgressed, forgotten, sinned against.（126）

どちらか一方の極に属するのではなく、両者の関連において立ち現れて

くる第三のものを、ここではキリスト教の三位一体のイメージを用いて「聖霊」と呼んでいる[4)]。

このようなイメージを用いたやや抽象的な表現のためであろうか、前述した Janik は作者の試みは認めながらも、『薄明』ではこの「相互作用」の表現はシンボリカルな試みにとどまっているとして、その限界を指摘していた。しかしながら、少なくとも『薄明』の二元論哲学が、二者択一ではない方向性を志向しているという側面はあらためて注目・評価されるべきである。二元論的差異化の傾向が近代の思考に特徴的なものであるとするならば、『薄明』の旅人＝語り手は、そうした近代を超える思考を模索しているとも捉えられるはずである。要するに、『薄明』で展開される「哲学」は、まず二項対立的にそれぞれの「ホーム」に属性を与え、そしてその後「ホーム」への帰属状態を脱して新たな道を模索すること、言い換えれば「ホーム離脱（エグザイル）」の状況を理論化しようとする試みとして捉えることができるのだ。そして小論はこの点をJanikのように消極的に、シンボル的抽象論に押し込めてしまうのではなく、第Ⅳ節で見るように、定住することなく動きつづける旅人の姿に第三の道の可能性が追求される様を見ることによって、積極的に『薄明』のテクストを読むことを提唱するものである。

Ⅲ.『薄明』の時代と舞台

「はじめに」ですでに若干触れたように、『薄明』前半のエッセイは作者の1912年の旅、後半は1913年８月の旅がもとになっている。繰り返しになるが、これらは『イングリッシュ・レヴュー』誌1913年９月号のために執筆したいくつかのエッセイと、それらも含めて1915年７月末から『薄明』として翌年の出版に向けて改稿・執筆されたものであった。本節では上に見てきた『薄明』の主要問題と作者とのかかわりを執筆前後の時期の中に探ってみたい。

「帰属」という問題設定をしたときにまず見ておきたいのは、作者ロレンスの母国イギリスへの姿勢である。ロレンスは E．ガーネットに当てた1912年７月の手紙の中で次のように述べている。

> Why, why, why was I born an Englishman! ── my cursed, rotten-boned, pappy hearted countrymen, why was I sent to them. (*Letters*, Ⅰ, 422)

フリーダ・ウィークリーと駆け落ちしてたどり着いたドイツからの手紙の中で、ロレンスは自分がイギリス人であることを呪っている。フリーダの夫で、ロレンスの大学時代の恩師でもあるアーネスト・ウィークリーは離婚に応じそうもない。また出版者からは小説に関していい評価がもらえない。そのような状況でのイギリス批判である。

もちろん少ない事例からロレンスの母国に対する態度を断じることには十分慎重でなければならないが、ここでは彼とイギリスという国家との関係を示唆しているような２つの事例に着目してみたい。ひとつは、よく知られた『虹』（*The Rainbow*）の出版差し押えに関わることである。『虹』は『薄明』改稿の終盤、1915年９月30日に出版された。井上義夫の説明によると、10月前半から出始めたいくつかの書評は、この小説の反社会性やわいせつ性を指摘し糾弾していた。そして『虹』は11月３日に差押え処分を受けることになった。1857年に制定された「わいせつ印刷物取締法」に抵触するという理由からである。その年の11月６日、ロレンスはピンカー宛ての手紙に“I had heard yesterday about the magistrates and the *Rainbow*. I am not very much moved: am beyond that by now. I only curse them all, body and soul, root, branch and leaf, to eternal damnation.”（*Letters*, II, 429）と書き、その憤りを露にしているが、多くの作家や芸術家になかば宿命的に伴うような──特にロレンスには生涯つきまとわれることになる──作家と警察当局という国家権

力との衝突の事例である。創作活動を行なうのにも国家の存在を意識せざるを得ないような経験をこの時期のロレンスはしていた。

もう一点は彼と戦争の関わりである。周知のように1916年の出版前後はヨーロッパに第一次大戦が暗い影を落とした時代であった。1914年６月にイギリスに戻ったロレンスは、その年の８月、湖水地方を徒歩旅行中に開戦の報に接する。ロレンスはこの戦争には多くのところで反対の立場を表明しているが、その背景にあるのは、既成の世界観を根底から覆すような戦争の残忍さに対する一般的な嫌悪感だけではない。明確に国家と結びついた現実として戦争が個人に迫ってくるからでもある。それはすなわち兵役という経験を通してである。イギリス滞在中のロレンス夫妻はアメリカ行きを考えていた。当時のイギリスではアスキス首相の政策により徴兵制は回避されたが、18歳から41歳の男子全員に兵役の意志が確認されることとなった。海外移住にも制限がもうけられることになり、「いま国外脱出は祖国への忠誠宣言と兵役検査を必須不可欠の要件とするに至ったのである」（井上，291）。肺を病んでいたロレンスは、身体的理由から兵役は免れると思っていたが、国家への忠誠を示して兵役を免れることに耐えられず、兵役検査直前になって検査の列の中から逃亡するという行動に出ている（井上，291―2 参照）。「アメリカに逃亡するために祖国に忠誠を誓うことは」（同，292）ロレンスにはできなかった。

ふたつの事例から言えることは、当時のロレンスが国家権力の存在に非常に敏感にならざるを得ないような状況にあったということ、そして状況の性格、および彼の反応から判断して、恐らく彼の意志は、国家へ愛着を感じ帰属するというより、反発する方向に向いていたであろうということである。

国家と個人の関係を意識せざるを得ないような状況はロレンスが訪れたイタリアにもあった。ここでも２点を指摘することができる。戦争と

移民である。

イタリアにも戦争は暗い影を落としている。中世以降、諸州・諸都市が分立状態にあったものが、イタリア王国として統一されたのが1861年であることを考えれば、20世紀初頭という時期において、近代国家としてのイタリアはまだ新しい国家であった。近代国民国家論やナショナル・アイデンティティ論の文脈で語るならば、比較的新しい国家としてのイタリアは、人々に国境を意識させ、祖国への帰属意識を強化させることを通して「国民を創出」していく必要があったわけである。Giuseppinoが批判したように、また、国民国家論の言説などが指摘するように、戦争は「国民創出」のひとつの装置として機能する。テクストでは、“ John ”のエッセイが「トリポリ」での戦争に言及し、Giuseppinoも本稿36頁の引用の最後の段落で“ We should not be fighting in the Cirenaica ”と述べ、Cirenaica の戦いに触れている。当時のイタリアは植民地争奪戦に乗り遅れまいと、1911年から12年にかけて、北アフリカ、リビアの領有をめぐって対トルコ戦を開始する。12年10月のローザンヌ平和条約でイタリアによる当地の支配権が確立されるのであるが、『薄明』で言及されるトリポリもキレナイカも当地の地名である。イタリアは帝国主義の戦争を展開しているのだ。（森田，436－43、森田＆吉岡，66－77参照）

Micheluccioも“ the threat of an approaching war, the idea of twilight descending on Europe ”（xvii）と、戦争が『薄明』のひとつのモチーフとなっていると述べ、また、今指摘したように、テクストには戦争にまつわる記述が少なくない。“ John ”がそうであったように、また次節でも触れるが、兵役に服するために母国に「帰還する」というモチーフはたびたび繰り返されるが、青年と兵役の関係は、20世紀初頭の国民国家イタリアと国民の帰属の問題という文脈の中でとらえられてもよいだろう。

このように国民に帰属意識を持たせ、国家へと回収していく求心的な動きとは逆に、国家の外へと遠心的に作用する動きも見られた。移民である。アメリカへの移民についてはPaolo、Giovanni、Il Duroなどを登場させ、テクストもそれを記録しているように、当時のイタリアでは国外への人口流出は顕著であった。1911年の人口が3467万人の時、1911年に約53万人、12年に約70万人、13年に約86万人が国外へ出ていた。（森田, 433参照）ロレンスもイタリアで自らそれを見聞し、その多さに驚き、1914年２月の手紙に書き残している。

> And the men can't settle any more. They seem to have a nostalgia of restlessness. . . . When I think how practically seven men out of ten emigrate from the villages round about, go for seven years at least ― then the stability of the world seems gone.（*Letters*, II, 148-9）

国家に帰属する（／させる）動きと、国家から離脱していく動き、あるいは国家と帰属の問題を意識せざるをえないような状況が当時の作家のまわりには存在していた。ロレンスがこれに敏感でなかったとは考えにくい。

Ⅳ．帰還なき旅

『薄明』の最終エッセイは奇妙にも「帰還の旅」（The Return Journey）と題されている。なぜ奇妙かといえば、「帰還する」場所が「不在」だからである。作者ロレンスの旅について特に予備知識を持たない読者であれば、イギリス人の旅人＝語り手による旅行記『薄明』の最終章で「帰還」とあれば、通常イギリスへの帰還を想定するだろう。しかし旅人が戻るのはイギリスではなくイタリアなのだ。既述したようにこの旅は前半エッセイの基となっている旅とは別の時期になされたものであり、「帰

還」とはイタリアをもう一度訪れるという意味で用いられている。しかし、『薄明』をひとまとまりの旅のテクストとして見るとき、イギリス人がイタリアを旅するという状況において、通常の意味――つまりホームより出発してホームへ戻る――における出発点への「帰還」ではないために、往復運動あるいは円環運動としての旅は完結しないことになる。さらに「戻るべき場所」として想定される故郷やホームとして、当然のことながら旅人はイタリアをとらえてはいない。この意味において『薄明』の旅は「帰還なき旅」であり、したがって帰還することにより閉じてしまうことなく常に開かれている旅である。それゆえに、われわれがこれまで『薄明』の旅を見てきた視点に立つならば、旅行記を締めくくるにふさわしい、むしろ必然的なエッセイと言うこともできる。

当初「路上にて」“ On the Road ”というタイトルで企図されていたように（*Letters*,Ⅱ, 413参照）、このエッセイの旅人は実際旅の途上にある。つまりそれまでのエッセイでは、旅人が滞在した土地やそこの人々をいわば定点観測的に描いていたのに対して、ここではひとつのエッセイの中で旅人はスイスを縦断してミラノに至る旅をし、そこで出会う人や風景を観察するのだ。したがって第Ⅰ節以降われわれが着目してきた「帰属」という視点からは、旅人にとって「帰属しない」状況はより強化されていると言うことができる。これまで、イタリアに強く帰属する人々、あるいはそこから離れていこうとしている人々を観察してきた旅人であったが、ここでは自らが帰属しない生き方を実践するというかたちになっている。

この点から、本エッセイで旅人が自らを「宿無し（ホームレス）」と規定していることは極めて興味深い。しかもその境遇を肯定的にとらえている。“ I was so glad to be there, homeless, without place or belonging, crouching under the leaves in the copse by the road, . . . ”(208) と考え、帰属する場所を持たない状況を楽しんでいるのだ。「ホームレス」の旅人

の特質・アイデンティティはどう描かれているだろうか。帰属することを拒絶する旅人は、帰還すべき「ホーム」に縛られることがなく「自由」であろう。また帰属から解き放たれた者に帰される特徴は、流動性・変化・多様性などであろう。

その特徴の一端を、われわれは最終エッセイの旅人の姿にも認めることができる。それは表層的には言語の多様性という現象を通してテクストに刻まれている。読者は、母語としての英語以外にも複数の言語に堪能な旅人の様子に気づく。次の引用は彼が旅の途上で知り合ったスイス人青年 Emil とホテルのカフェに入る場面である。

> We called in for a glass of hot milk. I asked in German. But the maid, a pert hussy, elegant and superior, was French. She served us with great contempt, as two worthless creatures, poverty-stricken. It abashed Emil, but we managed to laugh at her. This made her very angry. In the smoking-room she raised up her voice in French:
>
> "Du lait chaud pour les chameaux."
>
> "Some hot milk for the camels, she says," I translated for Emil.
>
> . . .
>
> But I called to her, tapped the table and called:
>
> "Mademoiselle!"
>
> She appeared flouncingly in the doorway.
>
> "Encore du lait pour les chameaux," I said. (220)

旅人はドイツ語で注文する。恐らくスイス人青年との間でもドイツ語を使用している。ドイツ人を軽蔑的に扱うフランス人の店員を旅人がフランス語を使ってからかう場面である。

イタリアに入ると、Emilは「すぐさま外国人」(222) になってしまい

緊張気味なのだが、語り手はすかさずイタリア語に切り替える。イタリア語は語り手＝旅人にとって「ワインのように心地よく」（222）思われる程、外国語とはいえ、彼はそれをかなりの程度自然に操ることができる。

旅人は言語を切り替えることであたかもそれぞれ別のアイデンティティを演じているかのようだ。もちろん外国語に堪能な旅行者は多いだろう。ここの旅人の姿も単に複数の外国語に精通している旅行者のそれなのかもしれないが、次の例からもわかるように、語り手は旅人の言語使用に単なる旅行者の便宜的能力以上のもの、すなわち主体やアイデンティティの変化をも担わせているのである。

スイスで湖畔の“ villa ”に入り、そこを切り盛りしている old ladies に、オーストリア人であると自らの国籍を偽って話をする場面がある。前後の状況から、旅人はドイツ語を用いているものと判断できる。冗談半分のうそをついたというのではなく、旅人はむしろここでは明確に「イギリス人」ではいたくなかったのだと言う。

> I said this because I knew a doctor from Graz who was always wandering about, and because I did not want to be myself, an Englishman, to these two old ladies. I wanted to be something else.（209）

「いつも放浪している」（always wandering about）医者の事を思い出し、言語を使い分けることで、「何か別のもの」（something else）になり、異なる自己・アイデンティティを獲得することができる――少なくともそう考えようとしている旅人の姿がここにある。旅人の多言語使用は単に旅の便宜のためばかりではない。それは旅人の存在そのもの、彼のアイデンティティと関わっている。旅人の「ホームレス」のアイデンティティは固定されることはなく、必要に応じて変化して流動的なのだ。そ

の場の状況において――まわりの人物との関係において――アイデンティティを変化させている。われわれは、不変で、固定されたような旅人の姿ではなく、状況に応じて様々に異なる旅人に「なる」様子を読み取ることができるのではないだろうか。

旅人はまた「自由」でもある。

> So she left me again, whilst I sat in the utter isolation and stillness, eating bread and drinking the wine, which was good. And I listened for any sound: only the faint noise of the stream. And I wondered, Why am I here, on this ridge of the Alps, in the lamp-lit, wooden, close-shut room, alone? Why am I here?
>
> Yet somehow I was glad, I was happy even: such splendid silence and coldness and clean isolation. It was something eternal, unbroachable: I was free, in this heavy, ice-sold air, this upper world, alone. London, far away below, beyond, England, Germany, France ― they were all so unreal in the night. . . . The kingdom of the world had no significance: what could one do but wander about?（強調は筆者, 217）

とりわけ一人旅の経験のある者なら共感できる旅人の感情ではなかろうか。ひとり孤独に旅の途上にある自分がふと不思議に思える感覚。同時に、アルプスの高地の暗闇に独り、という思いが旅人に自由を感じさせ、旅こそが現実であり、世界・国家がむしろ非現実に思われてくる。「放浪する」（wander about）「ホームレス」の旅人は国家に帰属・帰還することなく、したがってそこに回収されてしまうこともない。その時々の関係の中において、変化し流動する複数のアイデンティティをまとい、自己を生きているのだ。

ところで旅人はこの「帰還なき旅」において「帰還していく」人物に

も出会っている。ひとりは初めて外国旅行をしているフランス人青年であり、もうひとりはルツェルン湖畔の German inn で出会うイギリス人青年である。ここで着目したいのは、旅人がこれら「帰っていく」青年の帰還の先――つまり「ホーム」――に何を見ているかという点である。フランス人青年は“ government clerk ”として働いているが、戻ってから兵役に服さねばならない。またイギリス人青年に関して語り手＝旅人は、“ I could feel so well the machine that had him in its grip. He slaved for a year, mechanically, in London, riding in the Tude, working in the office. ”（211）と言うように、「機械」のイメージを強く感じ取り、ロンドンで１年間あくせく働き、「２週間の」旅行でもガイドブックを片手にせわしなく動き回っている機械のような旅行者の姿を描き出している。青年の今の思いは「帰ること」のみであるかのようである。

> All he had courage for was to go back. He would go back, though he dies by inches. Why not? It was killing him, . . .（強調は筆者，212）

旅人は「帰還」にひどく敏感である。旅人はのちにこの青年のことを思い出すことがある。

> I . . . thought of my tired Englishman from Streatham, who would be on his way home. Thank God I need not go home: never, perhaps.（強調は筆者，218）

語り手＝旅人がこの青年の「帰還」の先に見ているのは、休むことなき――語り手にすれば非人間的に機械化されたような――労働に追われる日々である。さらに、彼がフランス人青年と二重映しのように考えられる時、帰還の先には国家という機構への従属という現実が待ち構えてい

ることになる。こうした状況において、帰還しなくてもよい自分のことを幸せに思っている旅人、さらには「決して帰らない」ことまでほのめかしている旅人の姿は注目に値する。「帰らないことをうれしく思った . . . . . .」という旅人の発言や、これまで議論してきたイタリアにおける帰属の問題――「帰還」が意味するホームや帰属と言う問題――を考えるならば、「帰還の旅」エッセイにおける帰還なき旅の意味を、あえて逆説的に読みこんでみてもいいのではないだろうか。

最終エッセイの旅人の姿にわれわれは何かに帰属することを拒絶し回避しようとする生き方を見ることができる。そのような旅人のアイデンティティは安定し固定化することなく、移動し流動していくアイデンティティであると同時に、語り手が「二元論哲学」の中で抽象的に追求していた第三の存在、すなわちいずれかの極に固着してしまうのではなく、第三の地点――中間地点――に、二者の関係性として立ち現れてくる存在のひとつの形態なのではないだろうか。それはどちらにも属さない、「境界の」アイデンティティということもできるだろう。またそれはひとつの存在のままで固定化し、常にその状態で「ある」（is）アイデンティティではなく、他者との関係の中に存在し、柔軟に変化し、多様な存在に「なる」（becoming）アイデンティティである。

旅人の姿が前景化するのは――たとえそれが一時的なもので、それゆえに象徴的なものであるとしても――帰属とは対極に位置する「ホームレス」というアイデンティティであり、その戦略である。小論の意図は「帰属しない状況」のすべてを美化することではもちろんない。ホームレスの状況を現実に生きる人々が直面する様々な困難は、「自由」の名のもとに溶解し、解消していくようなものではない。一方でこうした現実を見据えながら、「帰属すること」から派生する固定化や硬直化などの弊害に直面した時に、それに対する対抗的視座としての旅をとらえていくことや、旅人に特有のホームレスというアイデンティティに注目していく

というところに小論の主張するところはある。

おわりに

本稿では、ホームへの「帰属」という視点から『薄明』というイタリア表象のテクストの読み（直し）を試みてきた。帰属状態が招いてしまう硬直化や停滞といういわば「負の遺産」を一方に見据えながら、ホームレスではあっても常に動くことにより固定化を回避し、変化しつづけようとする旅する主体のあり方に注目するような読みを試みた。ここで今一度、小論第Ⅰ節の冒頭に立ち返り、バヴァーリア農夫の特質を“ is ”の存在として、“ becoming ”への希望を絶たれた存在として捉えていた旅人＝語り手の声を思い起したい。続く諸エッセイの中でイタリアを見つめる旅人は、過去からの古い秩序や生の形態にとらわれ土地に帰属し続け、常に不変で「ある」（is）存在の限界を描きながら、一方で、変化しながら多様な存在に「なる」（becoming）可能性を追求していたといえるだろう。

主体やアイデンティティの多様なあり方や、旅によってそれらに変化が生じるという認識は、「はじめに」で指摘したように、旅を論じる多くの論者に共有されていることでもある。例えば、Madan Sarupは次のように述べている。

> [I]dentity is changed by the journey; our subjectivity is recomposed. In the transformation every step forward can also be a step back: the migrant is here and there. Exile can be deadening but it can also be very creative. Exile can be an affliction but it can also be a transfiguration ― it can be a resource. I think what I am trying to say is that identity is not to do with being but with becoming.（強調は筆者, 98）

ここには、旅によってわれわれのアイデンティティや主体性が変化する可能性のあること、移民や亡命といった故郷離脱の体験が必ずしも負の結果につながるのではなく、新たな可能性をはらむことが述べられている。

英国カルチュラル・スタディーズ創始者のひとりでもあり、その後の文化研究にも大きな影響力をもってきた Stewart Hall にも以下のような発言がある。

> Cultural identity, . . . is a matter of 'becoming' as well as of 'being'. It belongs to the future as much as to the past. It is not something which already exists, transcending place, time, history, and culture. Cultural identities come from somewhere, have histories. But, like everything which is historical, they undergo constant transformation. Far from being eternally fixed in some essential past, they are subject to the continuous 'play' of history, culture and power.（225）

もちろん Hall の言うカルチュラル・アイデンティティは、カリブの複雑な歴史を背景にしたものであり、したがって単純に一般的なアイデンティティ論に接続してしまうことはできないかもしれない。Hall が、カルチュラル・アイデンティティは「歴史」を持ち、「歴史、文化、権力の『戯れ』」に左右されると言う時、この「歴史」は複雑で重い意味を帯びている。しかし少なくとも Hall の論から「アイデンティティは『本質』ではなく、何らかの『起源』によって保証されるものでもない。アイデンティティがつねに新たに形成されるものであり、現在置かれている不安定な位置を指す概念にすぎない」（西川，49）ということを読み取ることは誤読にはならないはずである。

Sarup も Hall もアイデンティティを“ being ”ではなく（／だけでな

く）“ becoming ”としてとらえようとしている[5)]。20世紀初頭の『薄明』というテクスト――特に小論第Ⅰ節の冒頭で引用したバヴァーリア農夫の描写――を Sarup や Hall の横に並べた時、その偶然の類似性には驚くばかりである。「なる」アイデンティティを強調する背後にあるのは、「固定化」を徹底して拒否し続け、常に変化し続けるという態度・姿勢であろう。アイデンティティを “ being ”ではなく、変化しうるもの、“ becoming ”なものとして考える姿勢。それはポストコロニアルの批評状況にあって「差別的なヒエラルキーを内面化させ、それによって世界における自らのアイデンティティを固定化させる文化的ヘゲモニーの装置」（姜，213）としてのオリエンタリズム的な思考形態を反省し批判する視座から生まれてきている、流動的なアイデンティティ観に通じるものと考えることができる。政治思想史の立場から姜尚中が指摘するように、二元論的に「他者」を定位し、ヒエラルキー関係を内面化させて固定化してしまうことは、オリエンタリズムの戦略であった。二元論的配置に固定されることを拒否し、そこから逃走しつづける「ホームレス」の旅人は、一方で根無し草としての不安定さがもたらす困難を常に抱え込むことになるが、他方では、これまで見てきたように、（国家に）帰属する生き方とは異なる可能性、固定化されたアイデンティティとは異なるアイデンティティを獲得する可能性をも同時に持ちあわせている。

「はじめに」で示した情勢認識に戻るならば、グローバリゼーションが浸透し、近代的国民国家の限界がいろいろな局面で指摘されるようになってきた今日、個々のレベルにおける自己確認の仕方も、ナショナルなものを含めた、何かに固定化されたあり方ではなく、流動的で多様なアイデンティティのあり方が模索され提唱されるようにもなってきている。

小論ではいわば “ is ”の存在として、固定化されたアイデンティティのあり方が、過去からの古い秩序や生の形態にとらわれたイタリアの姿として表象されていることを見てきた。そして、このような土地に帰属

しつづけることの限界を描く旅人の姿、そして最後にはそれらの束縛から解放され、「ホームレス」となった旅人の姿を見てきた。

「有能な旅人はかたまりを溶解し、固定化されたものをゆるめるという技の達人である」(89) と言う Z. Bauman のことばを待つまでもなく、確かに旅人の属性は近年始めて発見されたような特にめずらしいものでもないかもしれないが、旅人の視点の持つ可能性やアドバンテージは再認識・再評価されてもよいであろう。こうした観点からは、20世紀初頭における『薄明』の語り手＝旅人の先見性もより積極的に注目していくことが可能になるだろう。安住しないこと、動きつづけることによって、常にアウトサイダーとして外からの相対化するような視点を持ちつづけることの重要性は、ディアスポラの批評家 E. サイードが主張しつづけたことでもあった。

注

1）この老女の表象に関しては、イタリアを「過去」として表象するテクストの特徴として、別のところで論じたことがあるので、拙稿「ロレンスのトラベル・ライティング研究序説――イタリアの表象」(『D. H. ロレンス研究』第13号，2003年) を参照されたい。

2）PaoloとMariaの描き方には、*The Rainbow*におけるBrangwen家祖先の男女の関係を彷彿とさせるものがある。*The Rainbow*の出版は1915年で『薄明』の改稿の時期とほぼ重なっている。イタリア人の通時的な変化というだけでなく、ここにはジェンダーの問題も関わっており、両テクストの関係について検証されるべきであろう。しかしながら、本稿ではその議論に踏み入ることはできなかった。今後の課題である。

3）たとえば、ひろたまさきは、通行の自由や徴兵による軍隊への参加、資本主義化などにより、近代の人々がそれまでの比較的狭い地域社会から、広い世界へと投げ出されていく様子を述べている。

4）作者ロレンスは生涯にわたってこの第三の存在を追い求めたと言うことができるであろう。時にはそれが、雨と光によって創り出される「虹」として表現されたり、また別の箇所では光と闇をつなぐかのように現れる「宵の (明けの)

明星」というシンボルで表されることもある。

5）ナショナル・アイデンティティを論じる川上勉は、ナショナル・アイデンティティの２つの側面として「動員」のアイデンティティと「参加」のアイデンティティを指摘し、そこからさらに、「なる」アイデンティティを、「参加する」アイデンティティ論へと展開させている。

参考文献

Aldington, Richard. “Introduction.” *Twilight in Italy*. London: Heinemann, 1956.

Bauman, Zygmunt. *Postmodernity and its Discontent*. Cambridge: Polity Press, 1997.

バーガー，P．L.，B・バーガー，H・ケルナー.『故郷喪失者たち』（高山真知子，馬場伸也，馬場恭子 訳）新曜社，1977年.

Fasick, Laura. “Female Power, Male Comradeship, and the Rejection of the Female in Lawrence’s *Twilight in Italy, Sea and Sardinia, and Etruscan Places.” D. H. Lawrence Review*（Vol. 21, No. 1, Spring 1989）.

Gilroy, Paul. *Black Atlantic*. London and New York: Verso, 1993.

Hall, Stewart. “Cultural Identity and Diaspora.” Ed. Jonathan Rutherford. *Identity*. London: Lawrence & Wishart, 1990.

ひろたまさき.『近代日本を語る』. 吉川弘文堂，2001年.

Hulme, Peter and Tim Youngs（Eds）. *The Cambridge Companion to Travel Writing*. Cambridge: CUP, 2002.

井上義夫.『新しき天と地』（評伝D．H．ロレンスII）．小沢書店，1993年.

石原浩澄.「ロレンスのトラベル・ライティング研究序説 ── イタリアの表象」.『D．H．ロレンス研究』（日本ロレンス協会，第13号，2003年）.

Janik, Ivan Del. *The Curve of Return*: *D. H. Lawrence’s Travel Book*. British Columbia: ELS Monograph Series No. 22, 1981.

姜尚中.『オリエンタリズムの彼方へ』. 岩波書店, 1996年.

川上勉.「ナショナル・アイデンティティの２つの側面」. 中谷猛，川上勉，高橋秀寿編『ナショナル・アイデンティティ論の現在』. 晃洋書房，2003年.

Lawrence, D. H. *Twilight in Italy and Other Essays*. Ed. Paul Eggert. 1994. Harmondsworth: Penguin Books, 1997.

Letters of D. H. Lawrence, I. Ed. James T. Boulton. Cambridge: CUP, 1979.

Letters of D. H. Lawrence, II. Eds. George J. Zytaruk and James T. Boulton. Cambridge: CUP, 1981.

Meyers, Jeffrey. *D. H. Lawrence and the Experience of Italy*. Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press, 1982.

Michelucci, Stefania. "Introduction." *Twilight in Italy and Other Essays*. Ed. Paul Eggert. 1994. Harmondsworth: Penguin Books, 1997.

Morgan, Marjorie. *National Identities and Travel in Victorian Britain*. Basingstoke: Palgrave, 2001.

森田鉄郎（編）.『イタリア史』. 山川出版社, 1976年.

森田鉄郎, 重岡保郎（編）.『イタリア現代史』. 山川出版社, 1977年.

Nehls, Edward. "D. H. Lawrence: the Spirit of Place." Eds. Frederick J. Hoffman and Harry T. Moore. *The Achievement of D. H. Lawrence*. Norman: Univ. of Oklahoma Press, 1953.

西川長夫.「グローバル化時代のナショナル・アイデンティティ」. 中谷猛, 川上勉, 高橋秀寿編『ナショナル・アイデンティティ論の現在』.

Pratt, Mary Louise. *Imperial Eyes*. London and New York: Routledge, 1992.

Sarup, Madan. "Home and identity" *Traveller's Tales*. Eds. George Robertson, Melinda Mash, Lisa Tickner, Jon Bird, Barry Curtis and Tim Putman. London and New York: Routledge, 1994.

Smith, Anthony D. *National Identity*. Las Vegas and London: Univ. of Nevada Press, 1991.

Tracy, Billy T. *D. H. Lawrence and the Literature of Travel*. Ann Arbor, Michigan: UMI Research Press, 1983.

Wagner, Jeanie. "D. H. Lawrence's Neglected 'Italian Studies'" *D. H. Lawrence Review*（Vol. 13, No. 3, Fall 1980）.